

Title	Event Construal in Grammar : A Cognitive Study of English Resultatives and Cognate Objects
Author(s)	堀田, 優子
Citation	大阪大学, 1998, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/40509">https://hdl.handle.net/11094/40509</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	堀 田 優 子
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 13592 号
学位授与年月日	平成10年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科英文学専攻
学位論文名	Event Construal in Grammar : A Cognitive Study of English Resultatives and Cognate Objects (文法における事態解釈－英語の結果構文と同族目的語構文の認知的分析－)
論文審査委員	(主査) 教授 河上 誓作  (副査) 教授 藤井 治彦 助教授 大庭 幸男

#### 論文内容の要旨

1980年代に入り、言語が人間の認知的なメカニズムと密接に関わっているとの前提の下で、様々な言語事象を、認知的な世界像（つまり意味）やそれを形成する認知能力（イメージ形成能力）・認知プロセス（イメージが形成される過程）と関連づけて体系的に捉えようとする認知言語学的な研究が盛んになってきた。本論文は、She swept the room clean. のような英語の結果構文と、Susan danced a beautiful dance. のような同族目的語構文を取り上げ、各々の構文の様々な特異性や制約に関して、主に Ronald W. Langacker の提唱する認知文法に従って詳細な分析を試み、それぞれの構文の形と意味の関わり（動機づけ）を事態認知の観点から明らかにしようとするものである。本論文は英文で書かれ、構成は5章、68節から成り、A4判、221頁である。

第1章は序論で、本論文で取り扱われる英語の結果構文と同族目的語構文が定義され、論文全体の構成が述べられる。

第2章では、本論文が前提とする理論的枠組が説明される。Langacker の認知文法の基本的な考え方、事態認知モデル、Croft の 'causal chain' モデル、Langacker と Croft のモデルを統合した新しい認知モデルが導入され、本論文の中心をなす第3章・第4章に向けての理論的基盤が整えられる。

第3章は、英語の結果構文の認知的分析である。英語の結果構文は、主に「主語＋動詞＋目的語＋結果述詞」という形をとる。結果述詞は、動詞が示す行為によって引き起こされる目的語 NP の結果状態を示している。結果構文に現れる動詞や結果述詞は制約的で、イディオム化しているものも多いが、同時に非常に生産的でもある。本論文では、「結果構文の認知モデル」を提案し、それを基にして、結果構文に現れる動詞や主語・目的語位置にくる NP、また結果述詞の特徴や制約などに動機づけを与える。また、「path（経路）が枝分かれしてはならない」という制約が結果構文に働くことや、有界的（bounded）な解釈、さらに容認性に差が出る派生的な例とプロトタイプ的な例との関わりなどに対して、詳細な認知的分析がなされる。

この分析で中心的な役割を果たす「結果構文の認知モデル」は次のように説明される。そもそも結果構文は、動詞が示す行為によって目的語 NP が影響を受け、その結果、ある状態になることを示している。つまり、事態の参与者（Agent）から別の参与者（Patient）へエネルギーが伝達され、その結果、Patient が変化し、ある状態になると考えられる。従って、結果構文の認知モデルでは、Agent から伸びたエネルギー伝達を示す二重線の矢印が Patient に達し、Patient から伸びた変化を示す矢印が結果状態に達するまでが認知スコープ内に収められている。さらに結果

構文は、動詞が示す行為が直接原因となって結果状態を招くという即時的・直接的解釈がなされるため、(1)に示すように、動詞と結果述詞に別々の空間的・時間的セッティングを与えることはできない。このことから、我々は結果構文の示す事態を時間的にも空間的にも一つのセッティングの中で起こっている事態として認識している、といえる。従って、プロトタイプ的な結果構文の認知モデルは図1のように示すことができる。(＊印は非文を表わす。)

- (1) a. \*In a forest, Tom shot Bill dead in a hospital.  
 b. \*Yesterday Tom ate himself sick today.

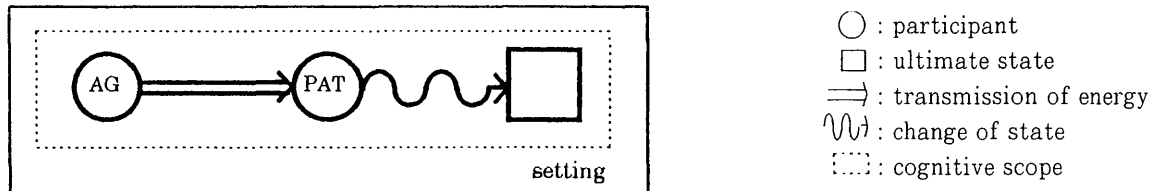


図1：結果構文の認知モデル

本章では、この認知モデルに基づき、結果構文の様々な言語現象を統一的に説明しようと試みるが、その主な主張点は、①結果構文に現れることができる動詞は、エネルギー伝達を含む事態構造として認知される動詞であること、②結果構文に現れる主語や目的語は、それぞれ Agent と Patient に解釈される二つの参与者であること、③結果述詞によって示される状態は、主語の状態ではなく、目的語の状態ではなく、この特徴は、参与者と結果状態との順序付けが chain によって示されている認知モデルによって動機づけられていること、④結果構文で示される事態の path (経路) は、図1の認知モデルが示すように一つでなければならず、chain は枝分かれしないこと、⑤共起できる結果述詞には、path や有界性などが関与しており、このことは認知モデルから適切に捉えられること、⑥結果構文の形を取るさまざまな表現の多様性は、プロトタイプ的な結果構文の派生として捉えることが可能であること、などである。

第4章は同族目的語構文の分析である。英語の同族目的語構文は、主に身体的行為を示すような動詞が、それと同一語源の(つまり「同族の」)名詞を目的語としてとる構文である。英語では、こうした身体的な行為を表すために、副詞を伴う自動詞構文が用いられるのが普通である。そのため、同族目的語構文は「自動詞+副詞」と同じ意味を示しているに過ぎないと考えられてきた (John smiled a happy smile ; John smiled happily.)。しかしながら、必ずしも同族目的語を修飾する形容詞が副詞的に解釈が可能なのではない (Mary dreamt a strange dream. ≠ Mary dreamt strangely.)。本章では、このような同族目的語構文に対して、(i)「自動詞+様態の副詞」表現との関わり、(ii)同族目的語構文に現れる動詞に関する制約、(iii)同族目的語の認可、(iv)同族目的語の解釈と他動性の関係などに関して、認知文法の枠組に沿ってその動機づけを明らかにしようとする。

このうち(i)については、認知文法では、形容詞と副詞はどちらもトラジェクターとの非時間的な関係をプロファイルしていると考えられているが、形容詞の場合、トラジェクターは「もの」であり、副詞の場合は「関係」である点が異なる。同族目的語は動詞的解釈と名詞的解釈の二つを併せもつため、同族目的語と形容詞との修飾関係は、対応する動詞と副詞との関係と並行的に解釈できる。しかし、同族目的語の名詞的側面の方が強く認知されると、上記の dream の例のように、修飾関係の並行性はみられないと説明する。

(ii)については、自動詞には大別して非能格動詞と非対格動詞があるが、非能格動詞のみ同族目的語をとることができる (He walked a funny walk.)。非能格動詞の事態認知は、主語が自らにエネルギーを与え、変化を引き起こしていると考えられることができる。しかし、そのエネルギーが再帰的であるため、他の他動詞節ほど他動性が高くなく、目的語位置にくる名詞も動詞によって示される行為に限られる。

(iii)に関しては、同族目的語構文に現れる動詞のエネルギー伝達が再帰的であるため、別のものに働きかけるのではなく、その再帰的エネルギーは主語による行為しか生み出さず、そのため、同族目的語構文では同族目的語しか許されない。一方、目的語が動詞の同族目的語の概念をより特定化していると解釈される場合は、一見、動詞と同族でない名詞が共起できる (He slept a fitful slumber.)。

(二)に関しては、同族目的語の解釈には、次の3種類の可能性がある：(a)動詞が示すプロセス・タイプの具体事例としての解釈、(b)動詞が示す行為から独立した特定のプロセスのタイプとしての解釈、(c)動詞が示すプロセスとは関係なく存在するものとしての解釈である。(ただし、(c)の解釈が可能な名詞は、そもそも「もの」としての解釈が可能なものに限られる。) (a)から(c)のどの解釈がなされるかは、単に動詞によって区別されるものではなく、同族目的語がどのような修飾要素を伴っているのか、同族目的語がプロセスの解釈と「もの」の解釈のどちらをより強く想起させるかなどによって決まる。

- (2) a. She danced a reluctant dance. [(a)]
- b. She danced a beautiful dance. [(a), (b) or (c)]
- c. She smiled an attractive smile. [(a) or (b)]
- d. She smiled Mona Lisa's smile. [(b)]

このような解釈の違いは、同族目的語構文全体の他動性の違いを生み出す。例えば、smileはものを指すことができないので、(a)と(b)の解釈しかないが、(b)の方が(a)より「もの」的なので他動性が高い。一般に、受動化が可能な場合は不可能な場合より他動性が高いことから、(4)のテストが示すように、事態的な解釈の(3 a)より、より「もの」的な「やり方」を示す解釈の(3 b)の方が他動性が高いことが分かる。

- (3) a. Shirley smiled a silly smile.
- b. All the contestants smiled Marilyn Monroe's smile.
- (4) a. \* A silly smile was smiled by Shirley.
- b. Marilyn Monroe's smile was smiled perfectly by all the contestants.

第5章は本論文全体のまとめである。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、英語の結果構文と同族目的語構文の諸現象について、主としてLangackerの認知文法の枠組に基づき、認知言語学的分析を試みたものである。本論文の構成は、第1章：序論、第2章：理論的背景、第3章：英語の結果構文の分析、第4章：英語の同族目的語構文の分析、第5章：結論から成り、第3章と第4章が本論文の中心をなしている。

第3章では、英語の結果構文が図1に示したプロトタイプの認知モデルを基盤としていると想定することによって、この構文を構成する動詞、主語・目的語位置のNP、結果述詞の特徴などを捉えることができることを示し、結果構文におけるpathの一致や有界性、生産性の問題など、先行研究では必ずしも十分に扱えなかった問題についても、認知的アプローチが説得力を持つことを示唆した。

また第4章では、英語の同族目的語構文と、それとほぼ同義であるとされる「自動詞+副詞」表現との関連性を副詞と形容詞のスキーマから、また、非能格動詞が同族目的語をとることとそれが同族に限られることを動詞の事態認知から説明した。また、同族目的語の解釈には3つの可能性があり、その解釈の違いが同族目的語構文の他動性に影響を与えるということを認知的な側面から明らかにした。以上が本論文の概要である。

本論文は、理論の枠組はLangackerの認知文法に依存しながらも、論文としてのまとめ、文献・資料・実例等の妥当性、表現の明晰性等、いずれにおいても優れており、特に本論の中心部分にあたる第3章と第4章では、著者の鋭い観察に基づく緻密な言語分析が展開されていて説得力がある。本論の中心的な主張は、既に日本英語学会機関誌 *English Linguistics* に Horita (1994, 1995) として発表され、高く評価されているが、本論文の完成によって、わが国最初の認知文法の枠組に基づく結果構文・同族目的語構文の研究がまとめられたことの意義は大きい。特に認知言語学的研究への関心がだんだんと高まりつつある現在、本論文が学界に与える影響は大なるものがあり、認知的研究における重要な文献の一つになることは間違いないであろう。

とはいえ、本論の優れた成果にもかかわらず、この種の新しい理論にありがちな難点は残されている。本論文は一貫して、従来統語的な側面から説明が与えられてきた様々な制約や特徴を、純粋に認知的な道具立てを用いて捉えそ

の動機づけを与える，という立場をとろうとしているが，先行研究の検討と問題点の指摘の仕方については，やや断定的で不注意な部分があり，今後生成文法と認知文法が無用な理論的対立を引き起こさぬためにも，議論の仕方には十分注意すべきであろう。

しかしながら，この難点は本論文の欠点というより執筆上の注意点として位置付けられるべきものであり，決して本論文の卓越した価値を損なうものではない。よって本研究科委員会は，本論文を博士（文学）の学位を授与するに十分な価値を有するものと認定する。